

## 50年目の開校記念日に

始業前や昼休み、放課後の校内に応援練習の掛け声が響くようになると、新しい年度がたしかに動き出した感が強くなる。1966年創立の本校、20日に50年目の開校記念日を迎える。50年目ともなると、そろそろ伝統校と呼び習わす頃合かと思ひもする。

もとより年数だけで語ることはない。時間の経過だけに頼るなら、そこには伝統でなく停滞が生み出されるのみである。「悪しき伝統」などという語を耳にすることもあるが、それは伝統ではなく陋習と呼ぶべきことであろう。伝統という語には、一朝一夕にはその域に及びつかない、威厳や重み、さらには独自性のあるもの、あるいはそのことへの敬意があらわされている語であるに違いない。

『新明解国語辞典』で「伝統」を引くと、「前代までの当事者がしてきたことを後継者が自覚と誇りを持って受け継ぐところのもの。」とあった。一人ひとりが後継者として、現在における当事者として誇りを持って受け継ぎ、改変し、未来に繋げていくことが求められる。

入学式において、新入生代表生徒は、「心やさしき社会のリーダーになるには光陵で何を学べば良いか」という自らの問いかけに、「他人に流されることなく、自分の意志を持つこと」、「助け合うこと」、「広い視野で自分たちを見つめること」の三点で答えた。そして「行事や部活動を通してこの三つのことを学び、心やさしき社会のリーダーたる光陵生になれるよう努力します。」と決意をあらわした。「心やさしきリーダー」として映る2、3年生を敬い、自らも真剣に高校生活を送っていこうとする意志は、「私たちは自ら光陵に志願した。しかし志願した人すべてが光陵に来たわけではない。大勢の中から選ばれたという意識を持ち、一日一日を大切にしていこう」という言葉のとおり、光陵生としての責任を自覚したものであった。生徒一人ひとりが高い目標を持って、しっかり勉強し、真剣に部活動や学校行事に取り組み、心やさしき社会のリーダーをめざしてほしいと思う。

伝統校と呼ぶことのできる学校たり得るかを決していくとき。伝統校としての一步を印そうとする、そのような50年目の開校記念日である。

現在の光陵生が次代の光陵生に繋いでいくこととは何か。そのことを折に触れて考える、それが節目の年ということなのだろうが、さしあたり次の3点をあげることは可能であろう。

第一点として、勉強や部活動、行事に真剣に取り組む姿勢の継承。

光陵の生徒は目標を持って真摯に取り組む姿勢を持っている。これは光陵だけのことでなく、他校においてもそのような生徒は多いのであるが、高校での日々に真摯に取り組む皆さんの姿勢は、次代の光陵生に是非とも繋ぎたいものである。

第二点として、光陵独自の取組みの継承と発展。

学習では、答を導き出すことに挑む探究心を高めるとともに、生徒自らが考えたことを発表する機会が他校に比べて多い高校であり、この特色をさらに発展させたいと考えている。

体育祭の応援は光陵の特色的な取組みであろう。今年の応援練習は始まったばかり。始まったばかりではあるが、質の高さを感じ取ることができる。それは、3年生がかつて真剣に取り組んだことを2年生に伝え、2年生がさらなる高みをめざして1年生を教え、1年生がきちんと受け止めて練習していることによるものなのだろう。このような、生徒間の連綿としたつながり、また向上をめざす気質に伝統という語が相応しい。中庭に上履で出る生徒もなく、生徒の自律性の高さも感じ取っている。是非とも繋いでほしいことである。

第三点として、生徒の皆さんがステキな光陵生であり続けること。

応援練習の成果か、1年生の挨拶が板についてきた。すぐに2、3年生の、あのステキな笑顔が乗った挨拶にいたることであろう。

先月卒業した生徒たちの進学姿勢は素晴らしかった。難関の大学にも多く合格したのだが、そのこととともに、いやそれ以上に、多くの生徒が高い目標を持って臨んだことを誇らしく思う。挑戦する姿勢とそのための努力の継続は、これからも光陵生の矜持として繋いでほしいと強く思う。